

渡辺眞理 (デザイン工学部)

2016 第15回公共建築賞 優秀賞 【真壁伝承館】



受賞対象名	真壁伝承館
他の受賞歴	日本建築学会賞〔作品〕、日本建築家協会賞、 日本建築士会連合会優秀賞、BCS賞金賞
受賞者	法政大学デザイン工学部教授 渡辺眞理 工学院大学建築学部教授 木下庸子
概要	真壁伝承館は、図書館・公民館・歴史民俗資料館の3つの機能を備えた市民のための施設であると同時に交流拠点であり、観光インフォメーションセンター、休憩所等を備える。建物の構造は災害時の防災拠点になりうるように安全性の高い鋼板構造を採用している。さらに、自然環境にも配慮し空調設備に関する太陽エネルギーの利用（OMソーラー）や木ルーバーを設置し日射熱を緩和するなど積極的にパッシブソーラーの手法を活用している。
背景	真壁伝承館は、重要伝統的建造物保存地区に選定された桜川市真壁の中心部に建設された。この都市の伝統的建造物が、近世から昭和

期まで、市内に配置されていること、建物の種別も多岐にわたること、伝統的な門や坂塀も都市景観の重要な要素であるから、そういった建造物のプロファイルを複数採寸し（サンプリング）、この施設の計画的な要請に応じて組みあげる（アセンブリー）ことで、この都市の建築に潜在する何らかの空間的連続性がすくいあげられる可能性があるのではないかと考えた。

旧真壁町の伝統的建築物保存地区にふさわしいデザインを目指し、周辺地域の特徴的な建物のプロポーショナルを「サンプリング」し、敷地や施設の形に合わせて「アセンブリー」する新しい景観建築の提案を行った。そのため、当施設は自ずと周辺の建物と調和した建築ボリュームとなっている

審査委員の評価

この建物は、図書館、歴史資料館、集会施設、ホールが入る多目的複合施設であるが、設計上の大きな課題は、東から南に連なる筑波山系を背に、戦国期の真壁城に付属した集落を起源とし、江戸時代に陣屋が置かれた在郷町として発展した桜川市真壁の重要伝統的建造物群保存地区の中にあるという場所性・歴史性への応答であった。設計者はこの課題に対して、「サンプリングとアセンブリー」という斬新な設計方法を提案する。すなわち、街並みを構成する建物のプロファイルを複数採寸し、施設の計画的な要請に応じて組み上げると

いう方法がそれである。これは A.ロッシの〈タイポロジー〉の考えとも響き合うが、実は近代以前の一般的な方法であった。伝統的建築は長い時間をかけて多くの人々に使用され、少しずつ進化したもので、それらが互いに他を活かすことによって、美しい街並みを形成してきたのである。設計者は抽出された類型を組み合わせ、都市や歴史との連続性を継承しつつ、現代の機能や意味を充足し、未来を拓く建築空間を市民とともに創造する設計プロセスを展開したのである。こうしたプロセスを経て、スケール感、プロポーショナルともに素晴らしく、全体として美しく落ち着いた佇まいを感じさせてくれる見事な建築空間が出現した。内外に反復して現れる家型の基本形状は懐かしい集合記憶を喚起し、中庭に用いられた真壁石や外構の素材の違いによる陣屋跡遺構表示は地域や歴史とのつながりを想起させ、黒茶色に塗られたスギ木板のすかし貼りと白い遮熱塗料仕上げのコントラストは、伝統的でありながらモダンな雰囲気を醸し出している。分散配置された施設のコンポジションが、通り

抜け、広場、道空間など の豊かな媒介空間を創出している点も見応えがある。 外壁面を構成する鋼板パネルとパッシブソーラー設備という先端技術の導入は、未来の創造へのチャレンジの表現でもある。特に鉄板構造は自由度の高い開口部の設置を可能にしている。外壁に点在する大小の窓、内壁の窓を通して、遠くの間々や街並み、広場や内部空間、 行き交う人々の眺めを楽しむことができる。窓の大きさや位置に呼応して寸法を決め配置した家具などにも細やかな気遣いが認められる。 以上のように本作品は、建築と都市、建築と歴史、作り手と使い手の間に連続性を構築する新たな設計方法を提示するとともに、その実践を通して極めて質の高い建築空間を創造することに成功している。(建築学会賞〔作品〕審査評 一般社団法人 日本建築学会)



旧真壁町の伝統的建造物を中心に建物をサンプリングし、敷地に配置する



サンプリングした建物を敷地形状にアセンブリーさせる
サンプリングとアッセンブリーの方法